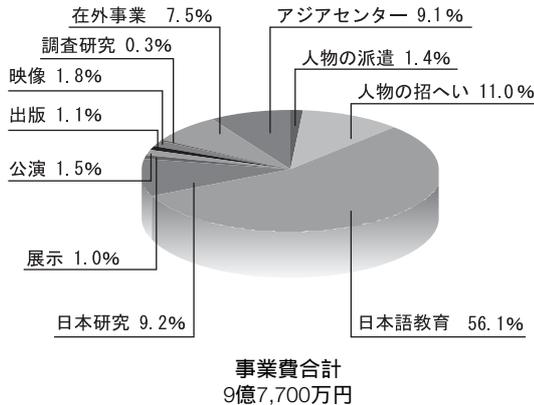


# 地域別報告

## 東アジア

### 概要



東アジアにおける事業実績額は9億7,700万円であり、国別では、中国と韓国の実績が大きい。中国は5億5,500万円ですべて第3位、韓国は3億5,500万円ですべて第6位である。また、分野別では、従来に引き続き日本語教育および日本研究の比率が高く、55.6%と全体の半分以上を占める。

韓国については、双方向性・共同作業の重視、日本文化の体系的・深層的理解の促進、共通課題への取り組みなどに重点をおいて事業を実施した。「日本文化レクチャーシリーズ」は、日本のグラフィックデザインや、ロボットテクノロジーによる産業創生と社会貢献を取り上げ、ソウルのほか地方都市に巡回した。シネマテーク釜山との協力による映画上映会は、日本映画を体験する場として定着しつつある。また、「日韓言論人ワークショップ」「日韓舞台共同制作」「日中韓NPOワークショップ」等、多様な分野における対話と共同作業を支援した。日本国内では、アジア現代美術個展シリーズとして、韓国女性作家イ・ブル氏の作品展を東京、岡山で開催した。

中国では、知的対話事業として、「21世紀のアジアを考える日中研究者フォーラム」の最終会合を開催、3年にわたる対話の成果が『日中関係をどう構築するか』（毛里和子・張蘊嶺編、2004年3月、岩波書店）として公刊された。写真展「日本の美を撮る」や日本映画講演会の実施など、伝統と現代のバランスのとれた日本文化紹介と地方都市への巡回にも努めた。北京日本文化センター開設から10年を迎えたのを機に、訪日フェローOBによる懇談会を開催した。また、基金が長年にわたり運営を支援している北京日本学術研究センターは、日本政府の無償資金協力による新施設に移転して、教育・研究活動の更なる充実に努めた。とくに

情報リソースの公開に取り組む図書資料館では、中国各地の図書館関係者の参加を得て「日本語文献リソースの整理と利用」ワークショップを開催した。

### 海外事務所報告

#### 韓国

##### ソウル日本文化センター

### 1. 概況

2003年の韓国は盧武鉉(ノ・ムヒョン)政権の誕生で幕をあげた。前年12月に行なわれた大統領選挙では国民の選挙行動に大きな変化がおき、前職大統領より22才も若い盧武鉉氏が選出された。

急速なスピードで市民社会化する韓国を象徴するとも見えたこの政権は、発足直後から「アマチュア政治」との批判を受け、大統領の支持率が急降下し、韓国社会の解析の難しさを露わにした。ワールドカップ共催、しかもベスト4進出を達成した2002年の上昇機運は、2003年に入り長期的経済停滞、労働争議多発、米軍基地問題、不正政治資金問題などにより一転して冷却した。そして2004年3月には国会において大統領弾劾という非常事態を迎えることになった。

このような政治状況の中で、これまでの韓国と根本的に違った点は、上記のような政治的動揺にも拘わらず、市民生活はきわめて安定し、一見して平穩無事な様相を保持し続けたことである。IT化が全国を席卷し、都市においては外国文化を含めた催しの数も大幅に増え、社会的雰囲気も変容した。前政権時代には国民的悲願であった南北統一に対しても、消極的な意見が大きく台頭するなど、なににつけても新旧が相克する様相を見せた。

国全体としては必ずしも順風満帆ではない状況のなかで、いわゆる「韓流」と称される韓国発のポップカルチャーがアジアを覆い、このような自信感を背景に、長年制限されてきた日本文化に対する門が2003年末には大幅に開放された。しかも、これにより日本文化が突如大量に流入するということもなく、成熟した社会状況を如実に反映した点は注目に値し、今後の日韓関係のあり方を示唆するところが多い。



Yes Yoko Ono展

## 2. 日本との文化交流事業

2003年は、前年の日韓共催ワールドカップによる社会全体の盛り上がり有一段落し、また、日韓国民交流年が終了したこともあり、日本との交流事業については、いわば「通常の年に戻った」ということができる。その一方で、2001年に起こったいわゆる「教科書問題」や「靖国参拝問題」によって凍結されていた日本文化開放に向けての動きが再開された年でもあった。

韓国にとって最も近い隣国である日本との交流が、「ワールドカップ以前」と比べてより身近で自然なものになった理由としては韓国社会の市民社会化が一段と進み、市民の関心と価値観の多様化が進んだことによって、日本への関心が「生活」「食文化」「ファッション」など、より個別的なものに移行してきたということが挙げられる。日本側で映画やアイドル歌手をきっかけとして、「韓国」が一種のブームになりつつあった状況と比較すると、韓国における日本への関心は、むしろ静かに、しかし着実な広がりをもって浸透していったということができる。

日本文化開放の動きとしては、盧武鉉大統領が2003年6月に訪日した際に発表された日韓首脳共同声明において、「文化交流を活発化させるため、韓国は日本大衆文化開放を拡大する」との文言が謳われ、9月および12月に第4次開放が決定された(実施は2004年1月)。また同時に共同声明では、2005年を日韓国交正常化40周年と位置付け「日韓友情年2005」として、両国の各界各層の間における交流を進め、さらなる相互理解と友情を増進する機会とすることも合わせて発表された。

## 3. ソウル日本文化センターの活動

### <活動方針>

ソウル日本文化センターが正式に開設して2年目となる2003年は、韓国国内において事業を実施する場合に重要となる各分野の専門機関・専門家などとのネットワーク作りに重点を置いた。また、一般公募事業においてより多くの良質な申請を得るためにも、センターの存在と活動内容を韓国国内に広報することに配慮して事業を実施した。とくに2002年の日韓国民交流年を契機として飛躍的に拡大したさまざまな分野の日韓交流の momentum を維持するためにも、センターの在外事業として実施している助成事業を有効に活用し、日韓間でとくに対話が必要と思われる分野の交流事業を支援した。

### <2003年度事業例>

#### ●「Yes Yoko Ono展」(2003年6月～9月、ソウル)

オノ・ヨーコ氏の約40年間にわたる芸術活動を紹介する大規模回顧展として開催された。展示期間には6万2,200名の観客が入場したが、これは同時期に開催されたピカソ展(サムソン美術館主催)の入場者数を上回る記録であり、現代美術の展示会としてはきわめて異例のこととして、美術専門誌をはじめ日刊紙やTVなど各種メディアにて多数紹介されるなど、各界の注目を集めた。2004年4月から6月まで東京で巡回展が開催された。

#### ●「日本映画回顧展」(2003年3月、ソウル)

2002年(11月～12月)東京で開催された「韓国映画：栄光の1960年代」の交流事業として、国際交流基金、東京国立近代美術館フィルムセンター、韓国映像資料院の共催で開催された。日本映画の黄金期ともいえる1950年代に活躍した巨匠監督15人の15作品を中心に上映を行ない、合わせて日本映画専門家による「日本映画フォーラム」も特別イベントとして開催された。上映会中には4,631人の観客動員を記録したが、これはソウルで開催される日本映画上映会の平均入場者数を上回る記録である。

#### ●「田中一光ポスター展」(2003年8月～9月、ソウル)

戦後日本のグラフィック・デザインを本格的に紹介する企画の第一弾として、田中一光氏のポスター展を開催した。「産経観世能」「日本舞踊」をはじめ、タイポグラフィなど同氏の主要作品52点を展示した。また、日本のグラフィック・デザイン全体についての理解を深めるため、武蔵野美術大学教授柏木博氏による講演会とデザイン図書展をあわせて開催した。会期中には計3,607名が入場したが、類似する展覧会がほぼ皆無の韓国において本展は時宜を得た企画となり、大きな注目を集めることとなった。



日本映画回顧展



田中一光ポスター展



●国際学術大会「日本学研究方法の再照明」(2003年7月、ソウル)

「韓国日本学連合会」(韓国における中心的な日本研究学会である韓国日本学会が、韓国日本語学会などほかの四つの学会と共に結成)が開催した初めての国際学術大会で、約400人の日韓の学者が参加(発表者は130人)し、日本学研究の新しい方向を模索するための討論を行なった。「体系的な日本学研究のために初めて行なわれた統合的な学術行事」という内容で新聞などマスメディアでも数多く報道された。

## 中国

### 北京日本文化センター

#### 1. 概況

2003年3月の全人代で正式に胡錦涛主席、温家宝首相体制がスタートしたが、新体制はその直後からSARSという大きな試練に直面した。広州、香港で広がったSARSは2003年4月には首都北京を襲い、4月末～5月初めにかけては北京の街がゴーストタウン化する異常事態となった。SARS禍による経済への打撃が懸念されたが、2003年後半にはほぼ回復し、沿海部を中心に引き続き高度成長を続けている。

対外関係でも経済優先の現実的な対外戦略をとっており、東南アジアやインドとの接近など多国間外交を意識した戦略に切り替えつつある。胡主席がフランスでのG8サミットに招かれるなど中国は着実に国際社会での存在感を増しており、また2004年2月に行なわれた北朝鮮をめぐる6か国協議ではホスト国として重要な役割を果たした。

日本との関係では、年間を通じ懸案となる事件が続き、日中関係は決して安定しているとはいえない一年となった。2003年は日中平和友好条約締結25周年にあたったが、前年の日中国交正常化30周年「日本年」「中国年」に比較すると若干盛り上がりには欠けた感否めない。

経済的ゆとりを持ってきた都市の一般大衆の間では、家計に対して教育や娯楽、余暇の費用が占める割合がますます増加している。都市部では連休に国内旅行を楽しみ、ローンを組んでマイカーを購入する中流階級層が増えてきている。一方、沿海都市部と内陸部の農村との経済格差は開く一方であり、「三農問題」(農業・農村・農民の問題)はますます深刻な問題となっている。

#### 2. 日本との文化交流事業

2003年前半はSARSの影響により予定されていた文化交流事業はことごとく中止となったが、そのぶん秋以降に文化行事が集中した。とくに9～11月は、前進座「天平の甕」北京・揚州公演、松山バレエ団「白鳥の湖」北京・上海公演(いずれも基金海外公演助成事業)など、前年にくらべ数は少ないものの、日本の一流の芸術を紹介する公演が相次いだ。また、裏千家、池坊、日本音楽情報センターなど中国内に常駐して日本文化普及活動を行なっている民間グループも着実な活動を続けている。政治的な事件に影響を受けやすい面もある文化交流事業であるが、事業



日本映画講演会

の成果を一過性のものとすることなく、継続的な相互理解、交流の拡大にどのように結びつけていくかが今後の大きな課題となるであろう。

### 3. 北京日本文化センターの活動

#### < 活動方針 >

##### ・中国の知的指導者、若手リーダーの知的交流支援

中国国内の欧米志向が強まるなかで、従来から日本につながるのがある日本研究者や日本専門家に加え、これまで日本に対する関心の低かった欧米研究者、国際関係研究者などに対象を広げ、日中間及びアジア多国間の知的交流を支援する。また、研究者のみならず実務家、NPO関係者などさまざまな専門分野でリーダーとなりうる人物の知的ネットワークを広げる。

##### ・知日層のコアとしての日本研究者育成と情報ネットワークづくり

高度な日本語能力を備え人文・社会科学の諸分野で専門性を広げていく日本研究者の育成も重要な課題である。基金が長年にわたり運営を支援している北京日本学研究中心(p.50参照)は、2003年9月より日本ODAによる新施設に移行し、図書資料など中国全国に対する日本研究の情報発信機能をますます充実させていくことが期待される。また日本研究拠点機関として支援してきた南開大学日本研究中心は2003年4月に日本研究院に昇格し、中国内の日本研究の発展にさらなる貢献が期待される。

##### ・多様なニーズをふまえた日本語教育の支援

日本語教育アドバイザーが中心となり、北京市内を拠点として研修会の実施などを通じ中等日本語教育に対する支援強化に取り組むとともに、大学などの高等教育機関の日本語教育ネットワークを支援する。また東北地方で中等日本語教育支援に取り組む青年日本語教師を側面的にサポートする。

##### ・顔のみえる等身大の日本紹介

若年層を主要な対象とし、日本映画講演会および上映会、写真展「日本の美を撮る」の実施などを通じて若者が親しみを感じる魅力的な現代文化・伝統文化を紹介する。

##### ・地方主要都市における事業展開

総領事館と連携し、文化紹介派遣や巡回展など、地方主要都市での事業を積極的に推進する。

#### < 2003年度事業例 >

##### ・日本映画講演会および上映会(2003年11月19日～20日、中国国際文化交流中心/北京)

中国国際文化交流中心との共催で、明治学院大学教授四方田犬彦氏による日本映画についての講演会を行なった。講演会に

先立ち、『キッズ・リターン』『シコぶんじゃった』の2作品の上映会を行なった。北京市内の映画関係者や日本語を学習する学生などを中心に200名を超える聴衆が集まった。講演後の質疑応答でも講師に対して専門的な質問が続き、日本映画やアニメに対する関心の高さがうかがわれた。また当地の雑誌『当代電影』『当代電視』にて本事業の特集が組まれた。体系的に日本映画について学習する機会がなかったため、本事業は日本映画についての理解を深める好機となったとの反応が多かった。本事業は上海、瀋陽、ウランバートルで巡回講演が行なわれた。

##### ・写真展「日本の美を撮る」(2003年12月12日～21日、陝西省図書館展覧館/西安)

中国国際文化交流中心、陝西省中日文化交流中心との共催により、写真展「日本の美を撮る」を西安にて開催した。展覧会場が文京地区の一角にある図書館内という、アクセスが容易な好条件の位置にあったため会期中1万3,500人もの入場者があり、大きな反響があった。当初、本事業開催前に発生した西北大学事件の影響がやや心配されたが、共催機関の適切な広報と実施体制により大きな影響を受けることなく成功裏に事業が終了した。本展は、長春(11月3日～10日、長春中日友好会館)、合肥(11月25日～12月3日、合肥亜明美術館)で巡回展示を行なった。

##### ・中等日本語教師セミナー(2004年2月4日～6日、武漢外国語学校/武漢、2月11日～13日、北京日本文化センター/北京)

センター日本語教育アドバイザーと中国課程教材研究所との共催により、中学高校の日本語教師対象の研修会を行なった。武漢外国語学校の協力により、はじめての中国南部での開催となった武漢セミナーでは、華東・華中・華南地域の8省2直轄市より25名の中等日本語教師が参加し密度の濃い研修会となった。北京市セミナーは華北地域を対象に41名の日本語教師が参加した。センターに日本語教育アドバイザーが着任して以来5年となり、中国の中等レベル日本語教育支援の活動が年々裾野を広げ、定着・発展してきていることが伺える活発なセミナーとなった。



巡回展日本の美を撮る



中等日本語教師セミナー